

くまもと面白漫遊記

～青木英二副委員長のおすすめはこの町・この人～

No.17

鹿本地区

命の水の湧きいずる山・慈観庵



その人を皆、慈観（じかん）さんと気軽に呼ぶ。
その人は、日本人よりも日本人らしく生きようとして
いる。
その人は、日本人が失ったままの「日本人魂」を
取り戻そうとしている。

その人は、イギリスからやって来た。
慈観（ジカン）・アドラー・コリンズさん。
「緑の光」に導かれ、命の水の湧きいずる山、
菊鹿町に「癒しの空間」を開いた



石宝山 慈観庵



千場さん 慈観・アドラー・コリンズさん 青木さん

緑の光に導かれて菊鹿町の山へ 水行と癒しの空間をつくった英国人

青木広報特別委員会副委員長の案内で、菊鹿町の山間へ向かう。取材班は、「面白い外国人の僧侶が住んでいる。」とだけしか聞かされていない。「一体、どんな人だろう？」頭にいろんな姿を想像してみるが、なかなか浮かんでこない。「あんずの丘」から車で10分、隈部城跡を過ぎて林道ぞいの竹山を拓いた空間にたどり着く。その自然の中の空間は「石宝山 慈観庵」(12月8日完成)。



山の斜面を切り開き、道を造り、石と木が並べられ、小さな木造の建物がある、まさに日本の素朴な原風景に近い。

「慈観さん！」と青木さんが植林をしている人に声をかけると、大柄で見るからにたくましそうな風貌から人なつっこい笑顔がこぼれた。

彼の名は、慈観（ジカン）・アドラー・コリンズさん、46歳のイギリス人。イギリス・バース出身、教育学学士であり、看護師であり、僧侶である。王立病院（ロイヤルホスピタル）など数多くの医療機関に従事、20年間「人が人らしく生きていくために」のケアとその研究に取り組んでいる。



医師による治療と連動したヒーリングを学び、イギリスでクリニック、ヒーリングスクールを主宰。日本に強い関心を持ち、来日後、1998年に熊本市で「ヒーリングケア&スクールKISH（キッシュ）」を設立し、ヒーリング、ヒーリングマッサージ、アロマテラピー、フラワーエッセンスなどを用いたケアとセラピストの養成を行いながら、現在もバース大学で教育学博士号取得に向け研究を続けている。そんな彼のプロフィールを知って、驚かない人はいないだろう。しかも、その彼がこの菊鹿の山に「癒しの空間」をつくるためにやって来たのだ。



なぜ、菊鹿の山なのか？ここに、何があるのだろうか？「ヒーリング」という言葉をここ数年、よく耳にする。「癒し」という意味だが、

現代社会がいかにか「心を病む」人々を生んでいるか、それを象徴する言葉でもある。「慈観庵」がどんな所なのか、一際目を引く白い水神様の像と、その下から湧きでる「水」が慈観さんと菊鹿を結びつけたのである。



※通訳は、慈観さんとヒーリングケア&スクール「KISH」を設立した千場布記子さんにお願ひしました。

青木副委員長 Q：「石宝山 慈観庵」とは？なぜ、この菊鹿の山につくったのですか？

慈観さん

A：「癒しと平和の空間」です。

風の音を感じて、夕陽を感じて一…。

そして、「魂」を感じる、神聖な場所なのです。

私の宗派は、高野山真言宗ですが、宗派に関係なく「水行」を行う場所としてつくりました。

それは、「人を癒すための水」がここにあるからです。6年前、阿蘇の満願寺の方にいた時、緑の光を見ました。その方向をたどっていくと、この菊鹿町の竹山だったのです。その「緑」の光が何か、なぜ見えたのか、分かりません。そして、そこを1メートルほど掘ると、水が湧き出てきました、人を癒すことができる「命の水」です。私は仏様からの贈り物=ヒーリング・ウォーターと信じています。

私はこの水で、21日間、水行をしました。禅をくみ、メディテーション（瞑想）をしました。



青木副委員長 Q：「水行」とは？

慈観さん

A：水行は、集中力を高め、精神を浄化、清めます。水行は、冷たい水にある「恐れ」を突き破ること。肉体もきれいになります、この水行場は、車椅子も、お年寄りも入れるようになっています。

青木副委員長 Q：ここは誰でも来られるのですか？

慈観さん A：もちろん、誰でも来られます。ここはお年寄りと若い人をつなぐコミュニティ。お年寄りの知識を生かす場所なのです。

“I Like Japan”

日本人よりも日本人らしい慈観さんが見たニッポン人 そして、慈観さんの日本人への熱い思い

青木副委員長 Q：ところで、いつ、日本に興味を持ったのですか？

慈観さん A：私は14年間、ブリティッシュ・アーミー（英国軍）で救急看護師として平和維持活動に従事、南アメリカなどへ行きました。その時、足をケガして車椅子の生活を強いられましたが、治療といえば薬を飲んでばかり。その時、生きる方法に様々な疑問が出てきました。「自然治療」のことを考えましたが、それが興味を持っていた「仏教」と結びついたのです。日本にずっと何かがあると感じていました。



日本の伝統的なものに魅かれたのかも知れません。

青木副委員長 Q：教育学の学士でもいらっしゃいますが、今の日本、今の日本人をどう思いますか？

慈観さん A：物質的なものにとらわれていて、生きる目的をなくした人をたくさん、見てきました。これは悲しいことです。「自分は誰なのか？」「何処へ行っていいか、分からない」人が多いのは、あまりにストレスやプレッシャーが多いからです。30歳代の人や子供たちに自殺者が多いという、日本人の大きな社会問題は、日本人の内面的な問題なのです。

「自問自答」して答えを見つけることが大切です。

青木副委員長 Q：なぜ、そうなったのでしょうか？

慈観さん A：日本人が一方的に教育されてきたからでしょう。

日本人は記憶力が優れています。しかし、質問をしない。

何を感じるか、という質問にも答えられない。

もっと質問をして、答えを見つけるべきです。

そして、もっと自分の価値を見い出すべきです。その教育は、1945年、第二次世界大戦以降に変えられてしまったのです。精神教育をせず、ナショナリズムもなくしてしまいました。

戦前の「日本人魂」＝武士道が失われています。

青木副委員長 Q：日本人よりも日本人らしい！

慈観さん A：I Like Japan！

I Like Japanese！

日本に帰化したいと思っています。

青木副委員長 Q：最後に、慈観さんの今後を教えてください。

慈観さん A：この菊鹿町に住み、人を癒す水とスペース「慈観庵」にホスピスをつくらうと思っています。

日本の伝統的なものの中で、日本人が日本人として亡くなる場所をつくりたいと考えています。そのために頑張りたい……。

日本人が失ったものがある慈観庵

取材を担当した青木副委員長からの一言

慈観さんは、すでに菊鹿町の人々に受け入れられ、交流を持つ機会も増えています。慈観さんには、宗教を越えた日本への熱い思いを感じただけでなく、人間的なあたたかさ、抱擁力があり、「心の支え」としての存在感を感じる。この取材は、決してPRではなく、慈観さんという人間の存在を知ること、日本人が失ったもの、なくしかけた人間性の大切さを考える機会になればと思ったからです。慈観さんが学んできた教育学、看護学、多くの医療体験に裏づけされたヒーリングケア、そのすべてが「慈観庵」に凝縮されている。「命の水」の湧きいずる所に立つ水神様。その顔は、慈観さんがまだ、日本を学ぶ以前から、浮かんでいた「顔」だという。それが仏様に似た穏やかな顔をしているのは、きっと慈観さんにとって菊鹿町に来ることが運命づけられていた証にも思えます。

取材先：石宝山 慈観庵 鹿本郡菊鹿町上永野原口2295 ☎0968-48-3884